

巻頭言

新国立劇場の

竣工しゅうこんに当たつて

日本芸術文化振興会会長

三浦朱門

平成九年の二月に新国立劇場が竣工した。

昭和六〇年、私が文化庁に入った時、当時は仮称第二国立劇場とか、単に二国とか呼んでいたこの劇場は、それより二〇年も前の国会の附帯決議の結果として、当時、設計の段階に入っていたのであった。

設計に至るまでの歳月は、基本的に劇場の具体的なイメージについての模索の時であった。この劇場が主として二〇世紀になつてから、西欧の影響の下に、日本で上演されるようになってきた舞台芸術のため、という目的は明らかではあった。だからと言って、事は簡単に進捗ちよくするとは言えなかった。新しい舞台芸術といつても、多くのジャンルがある。その様々な分野に、軽



みうら・しゅもん 東京都出身。作家。日本大学教授、文化庁長官等を歴任。日本ユネスコ国内委員会会長、教育課程審議会会長。日本ペンクラブ理事、日本芸術院会員。日本芸術院恩賜賞。著書『冥府山水図』、『犠牲』、『家長』、『日本人の心と家』等多数。

重の度合いがありうるのか、一つではなく幾つもの舞台を同時に作るべきなのか、それぞれの分野の舞台への欲求をどのようみに充たすべきなのか、さらには劇場が完成した場合には、誰だれがどのような形で作品を作り、上演してゆくのか。

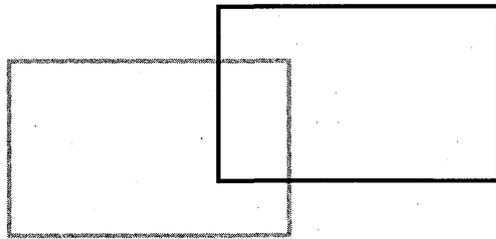
このような問題について、関係者が集まり論議し、次第に一つの具体案ができるのに、二〇年かかったということである。この分野の先覚者の何人かは、この段階の作業のうちに、この世を去る結果になった。劇場の竣工に当たつては、何よりもこの段階までに、努力を惜しまず、根気強く議論を重ねて一つのイメージをまとめあげた人々の、叡知えいと努力に脱帽しなければなるまい。

設計はこのイメージの具象的な表現であるが、この段階で建築団体から新しい提言があった。全ての、全世界の建築家が、この設計に参加する資格を与えられねばならない、というのである。あわただしくはあったが、何とかこの問題はクリアした。用地の問題もあった。国有地に建てるのだが、国有地ならどこでもよい、とは言えず、隣接する民有地の一部を買収しなければならぬこともある。そのための経費などは、空中権などという聞きなれない言葉だが、法的に許容されている建物の容積を、隣接する民間の建築に譲渡することで解決した。

するとこの民間のビルが巨大なものになり、テレビの電波障害や日照権がかかわってくるので、それも新国立劇場が解決すべき問題とされた。この建築をめぐる段階でも、当事者は多くの困難に耐えて、関係者の間を廻^{まわ}って説得に努めたのであった。

いよいよ建設にとりかかると、この劇場の運営、上演すべき作品の創作、選択などといった先送りしてきた問題が浮かんでくる。古い国立劇場は基本的には伝統舞台芸術のためであり、すでに何を保護すべきかは、ある程度自明のことであって、運営や制作についてはそれほど大きな問題はない。少なくとも創立三〇年以上になると、その仕事は自^{おの}ずと明らかである。

しかし新国立劇場は新という名前がつくだけに、上演される作品は日本の風土に芽生えてまだ一〇〇年とたたない、若い芽である。この若芽をどのように育ててゆくのか。肥料が少なくてもいけないが、多過ぎても、根を腐らせてしまっただろう。雨風や日照にどの程度さらし、どこまで保護すべきか、全ては未



知の世界である。

そのために新国立劇場は自律的に、自由に行動できるようにと、独立した財団法人を作って、これが運営にあたることになった。それでもなお、この財団が新たに作品を創作しようとする時、その費用をどのように捻^{ひん}出するのか、誰が制作の衝に当たるのか、財団は制作に当たって、どの程度、どういう形で関与すべきか、未解決の問題は山積している。新国立劇場はこれらの問題を一つずつ、多くの努力と才能を要求しつつ、解決してゆかねばならないのである。

しかしながら、今日、甲州街道ぞいの用地に、新国立劇場はようやく華麗な威容を現した。それでも一部の人はこれは理想とは程遠いというかもしれない。しかしこれが現代の日本の現況では、ベストの結果であることを、ここ一〇年以上も建設を見守っていた者として、私は保証することができる。

新しき酒は新しい革袋に、と言つ。ここに国民の税金の結晶としての、新しい皮袋ができた。新しい楽器はできた。その楽器を使う手続きも整った。あとはこの楽器を奏でる芸術家を待つばかりである。

新国立劇場はその華やかな姿は姿として、その前途はなお多難である。この劇場の未来が幸多いことを、私は切に祈る。この劇場が国民の輿^よ望を担って、新しい舞台芸術を全国に、そして世界に発信する劇場になることを期待したい。これまでの数々の難関を突破してこられた関係者たちは、必ずや国民の付託^{こた}に応^{こた}えることを確信している。